私の二“重”人生について

～ご挨拶に代えて～

松田　二郎

この度は、私の数え八十八歳を祝って下さるために、たくさんの皆さんがお集まり下さること、ほんとうにうれしくありがたく思っております。

先日、齋藤（平方）俊治君から一文を書けとの電話がありましたので、わが人生の朝日が射すところから西に夕日が傾く現在までを、手短かに振り返ってみることにしました。すると、二つの意味を持った〝重〟の一字が頭の中に浮んできました。

私は、一九三二年（昭和7）に東京で生まれました。その前の年に満州事変、小学校に入学する前の年に日中戦争が起き、4年生のときに太平洋戦争が始まりました。トドのつまりは、一九四五年（昭和20）五月二十五日、アメリカの空爆によって、わが家は跡形もなく壊滅しました。当時、小学校高等科2年生13歳だった私は、猛火の中を逃げ惑ううち両親にはぐれ、子どもコジキとこそドロをして生き延びました。

一週間後、運よく両親とめぐり合うことができ、父の実家がある寒河江にたどり着いてまもなく敗戦。二年遅れて、なんとなく寒河江中学校に入り、途中で高等学校に校名変更。クラスで一人だけ修学旅行に行けない極貧生活の中で卒業。そのとき、私は二十歳になっていました。

一年間、北村山郡の小さな中学校で代用教員をした後、大学へ。一九五七年（昭和32）縁あって鶴岡南高に赴任したものの、鶴岡には友人、知人、親戚は皆無。その上、庄内弁は十分に理解できず、親二人を背負った六畳一間の生活は、まさに〝重荷〟でした。〝重圧〟でした。月々の給料だけでは生活ができず、学校公認のアルバイトを4年間も続けて、生活費の足しにしたものでした。

こんな〝重〟を、それとは異質の〝重〟に転換できたのは、ほかならぬ生徒だった皆さんの存在でした。今を生きる少年期から将来を見据える青年期に移る皆さんと、授業を通して関わることは教員として当然ですが、〝重大〟な責務を感じたことでもありました。しかしそれ以外に、10kmの校内マラソンをいっしょに走ったり、クラス行事のハイキングをしたり、ロング・ホームルームでフォークダンスを教えてもらったり、金峯山中ノ宮で合宿勉強をしたり、日常から離れた修学旅行を楽しんだり、役に立たない顧問としてクラブ活動に携わったり……。それらも〝貴重〟な経験でしたし、今となっては〝重宝（ジュウホウ）〟と言える大切な宝ものになりました。

先ほど申しましたように、私は途中から庄内人鶴岡人になりましたので、当然ながらこの地にガキ仲間、親しい友人はいないのです。そういう環境の中で皆さんと出会ったことは、文字通り「貴重」な体験であり、「大切な宝もの（重宝）」なのです。わずか3年間か4年間の交流が起点となって、それ以来今日までお付き合いが長く長く続いていることを、この上なく幸せに思っています。

今、私は、人生の醍醐味を味わっているところです。

（平成31年4月27日「松田二郎先生の米寿を祝う会」記念冊子への寄稿文再録）